

疑問標識由来の認識変化詞の日中対照研究

－日本語の「そうか」と中国語の“真的吗/是吗”－

李昱琨(東京大学大学院生)

1. はじめに

会話においては、しばしば情報のやりとりが起きる。情報のやりとりには、自ら未知の情報を尋ねる場合や、意図せず新たな内容を耳にする場合があるが、いずれの場合も、より多くの情報を持つ者がまだ知らない者に情報を与える。Heritage (1984) は、英語の会話において、質問に対する応答を受け取る際、発話冒頭で感動詞“oh”を用いることで、話し手の認識状態が「知らない状態」から「知っている状態」へと変化したことを示す例を提示している。このような「認識状態の変化」を示す言語的要素は、「認識変化詞 (change-of-state token)」と呼ばれる。日本語の「そうか」と中国語の“真的吗/是吗”は、「知らない状態」から「知っている状態」への変化を表す認識変化詞として特徴づけられ、話し手の認識状態の更新を表明する手段として用いられるものである。ただし、これらの要素について、英語には見られない疑問終助詞に由来するという特徴がどのように認識変化詞の機能に影響を与えているのかについては、十分に検討されていない。本研究では、日本語の「そうか」と中国語の“真的吗/是吗”を並列的に検討することで、それぞれの特徴や相違点を明確にするだけでなく、認識変化詞が対応する異なる状況についての理解を広げることを目指す。

日本語の「そうか」は、指示代名詞「そう」と終助詞の「か」に由来する。「か」は、「内容に対する話し手の疑い (鈴木, 1976, 1988)」の意味以外にも、情報となる意味内容の一部を担って、「判断を保留する」という陳述と繋がりを持った意味を表すこともできる (丹羽, 2003)。また、井上 (2022) は日本語の情報受容の表現について、日本語では疑問形式と同じ「か」が情報受容の表現として用いられると論じている。一方、中国語の“真的吗/是吗”は、「本当ですか/そうですか」という意味を表し、副詞の“真的”・コピュラ動詞の“是”と終助詞の“吗 ma”に由来する。中国語現代文法において、疑問を表す終助詞には、主に“吗 ma”、“呢 ne”、“吧 ba”の3つがあるが、情報伝達の面から言えば、“吗 ma”のみが情報の確定性に関係なく、聞き手の情報に依存する疑問標識である。ただし、話し手にとって不確定な情報を表す場合には、真偽疑問文の標識に用いられるが、話し手において情報が確定している場合には、“吗”は“吧”と同様に、日本語の「ネ、ダロウ、ジャンイカ」に相当するものとして、有標平叙文の標識になる (木村・森山, 1992)。

第2節では、本稿の分析手法を紹介するとともに、扱ったデータの全体像と収集された用例の分布状況を概観する。第3.1節では、日本語における「そうか」とその認識変化に関する具体例を考察する。続く第3.2節では、中国語の“吗”に由来するフレーズが受動的な認識の更新を表す際に用いられる2つの事例を提示する。第4節では、形式的に類似しているこれら二言語の認識変化詞を対照しながら検討し、疑問形式が認識変化詞として機能する現象について考察を行う。

2. 研究方法とデータ

本研究では、“Multilingual Zoom Covid Project”において収集されたデータを使用する。このプロジェクトでは、日本語と中国語 (普通話) のほか、英語、韓国語、タイ語、広東語の計6言語でデータ収集を行い、初対面の二人がZoomで会話する様子を収録した。日本語と中国語のデータにつき、それぞれ30組、1組20分で、合計600分程度の会話の全過程が録画されている。参加者たちは初対面同士であり、会話収録開始の時点でお互いに関する情報は全く持っていない。また、本研究は、このデータを会話分析 (conversation analysis) の手法を用いて分析する。

データ分析の結果、日本語の認識変化詞「そうか」を含む例は81例、中国語の認識変化詞“真的吗/是吗”を含む例は19例見つかった。それらの順番交替における位置の分布は表1に示した。なお、日本語において「そっか」は「そうか」のバリエーションとして扱った。また、話し手の認識状態の更新を表明する手段として用いられる認識変化詞は、しばしば驚きや気づきを表す感動詞「あ」、「ああ」、「哦 o」などの後に続く「感動詞+認識変化詞」 (表1では「α+」の形で表記) の形式で頻繁に使用される。この形式は全体の約44% (日本語) および58% (中国語) を占めている。さらには、中国語では同一フレーズを2回以上連続して発話する繰り返し型は観察されなかったが、日本語の方で17例観察されており、これは日本語の認識変化詞に形式的な特殊性があることを示唆する。なお、表1の計数において、繰り返し型については重複を除き、

一例としてカウントしている。

表1 疑問標識由来の認識変化詞の連鎖上の位置分布

連鎖上の位置	「そうか」の用例数 ($\alpha +$)	“真的吗/是吗”の用例数 ($\alpha +$)
ターン開始部	42 (23)	5 (3)
ターン中間部	30 (6)	—
単独で一つのターン	9 (7)	14 (8)

3. 分析

3.1 日本語の「そうか」—自発的な認識変化の表明

例(1)は、小川が大学でサークルに入っていないことについて齊藤と小川が話している。断片の直前では、小川は大学がオンラインになったことで、新しい人間関係がなかなかできないという悩みがあることを述べている。13-16行目では、齊藤が小川の03-09行目の情報に対して質問を追加している。そこで、小川が笑ったが、まだ質問に答えていないうちに齊藤は「ああそうか」という発言で再度ターンをとる。このターンは、認識の変化を表すと同時に伝えられた情報について以前に知っていたことも示す日本語の「ああ」(Endo, 2018)と、疑問終助詞を使った「そうか」の組み合わせで、話し手は突然に気がついたと理解される。さらに同じ順番で、齊藤は「何されてたとかたぶん結構本題の一つなのか」という自問発話のような形式で、具体的に何に気がついたのかを述べる。ここでは、話し手が突然の思い出しにより今の自分の発言に対する認識が変わったことを示す「そうか」の働きが、文脈に関連する情報も加わった形で利用されている。つまり、小川に質問した内容が「本題の一つ」という認識は、15行目の前まではなかったものである。

例(1) [JCO#003 サークルできなかったら]

- 01 齊藤: サークルとかってあるんですか。
02 (0.3)
03 小川: 私サークル入ってないですけど[::],
04 齊藤: [あ:]なるほど.=
05 小川: =友だちは(.)やってるんですけど, だいたい緊急事態とかが出たら=
06 =>もう<活動してて- したら駄目みたいな感じ[で],
07 齊藤: [あ]::.
08 (0.3)
09 小川: なかなかきてないらしいです.=
10 齊藤: =°なるほど°.=
11 小川: =heh heh heh
12 (0.7)
13 齊藤: (なんかね) (0.7) .h サークルとか,
14 (0.9)
15 できなかったらどうするの,=
16 =な- なにされてるんですか.=
17 小川: =heh[heh heh]
18 齊藤: [ああそうか],
19 何されてた[とかたぶん]結構本題の一つなのか.
20 小川: [ああ::].

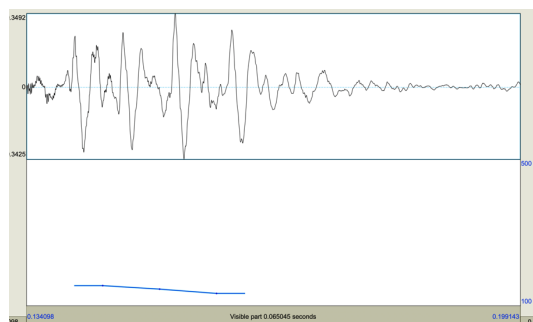


図1 例(1) 16行目“そうか”のピッチ曲線

例(1)において、「そうか」は認識の変化を表すものとして13-16行目に対する自己修復を開始する連鎖的な位置に用いられている。ここでは、話し手の齊藤は、「想定していなかった」ことを表明することで、13-16行目の質問の上に情報を追加するという行為を実現する。

同様に、次の例(2)も、話し手の認識変化が「そうか」で表明されている例であり、相手の情報を受け取った際に使用されている。例(2)では、原と森が大学のキャンパスについて話している。この断片の直前では、森が通う大学の政策学部のこと話題となり、その学部では様々な社会課題を解決する活動をしている人が多いことが語られている。この断片を連鎖的視点から見ると、原の質問に対し、森が回答をする(03-05行目)。ただし、この回答は、原の要求に応じて「桃山」という情報を提供すると同時に、質問者である原の確認を求めるものである。その続きでは、06-13行目を経て、その「桃山」に

ついて共通理解が確かめられ、15 行目では原が「そうか」を3回繰り返して使って回答を受け取る。その後、さらに「私紫野なんですよ」という発話で自分の情報も開示する。

例 (2) [JCO#004 キャンパスは京都]

- | | |
|---------------------------------|--------------------------------------|
| 01 原: すごいですね (0.5) いいな=なんか楽しそう. | 11 (0.4) |
| 02 (0.6) | 12 原: [はあ]. |
| 03 キャンパスはどこなんですか. | 13 森: [やつ]てます. |
| 04 (0.6) | 14 (0.8) |
| 05 森: 桃山ってわかります[か]. | 15→ 原: <°そうかそうかそうか°> (0.3) 私紫野なんですよ. |
| 06 原: [あ]: (0.3) 桃山[()] | 16 (0.6) |
| 07 森: [伏見の]. | 17 森: ああ,あの:北山の:. |
| 08 (0.4) | 18 (0.3) |
| 09 原: あっ伏見か,[京都], | 19 原: あそうですそうです.= |
| 10 森: [はい] (0.5) 京都で, | 20 森: =はい. |

3.2 中国語の“真的吗/是吗”一受動的な認識変化の表明

例 (3) では、秦と楊が各自の近況について話している。03 行目では、楊が“啊真的吗”「あつ、本当ですか」と言って、秦の提供した“胖了十多公斤”「10kg 以上太ってしまいました」という情報を受け取る。図2 のピッチ曲線が示すように、認識変化詞の“真的吗”は下降のイントネーションをとる。“真的(吗/啊)”は、情報を受け取る側の話者が新しい情報に接した際に生じる意外や驚きの感情を表し、情報を提供する側の話者の発話権を奪うことなく、その情報に関する話の展開や語りのさらなる進行を促進する標識である (Zhang, 2019)。このターンは、相手の発話内容の真偽を問題にしているわけではなく、別の人の提供した新情報と接触し、それを受け取ったことを示す聞き手反応である。

例 (3) [MCO#006 10kg 以上太った]

- 01 秦: 就因为这个疫(h)情(h), (0.2) 呃(.)就又胖了十多公斤,
(コロナ禍のせいで、ええと、10kg 以上太ってしまいました)
- 02 真的是一点都不夸张 (.) 胖了- =
(本当に大げさじゃないです。太って-)
- 03→楊: =啊真的吗.
(あつ、本当ですか.)
- 04 (0.2)
- 05 秦: 对对真的真的.
(そうそう本当です.)

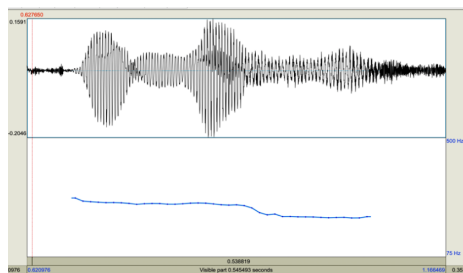


図2 例 (3) 03 行目“真的吗”のピッチ曲線

次の例 (4) で使われている疑問句“是吗”は、認識変化詞として機能するという点では例 (3) の“真的吗”と似ているが、“是吗”は実質的な意味が薄れ、語用論的標識になりつつあることが邹・周 (2018) によって指摘されている。例 (4) では、胡と王が日本に来てからの見聞について話している。01 行目の発話で、胡が街でよく見かける無料PCR 検査のことについて述べている。この無料PCR 検査という指示対象は、ここではじめて言及された情報であり、聞き手の王が認識できるかどうかはまだ不明である。0.4 秒の沈黙のあと、胡は王に確認を求める (04 行目)。すると、王は「一度も見たことないです」と答えて、無料PCR 検査のことについて認識できないことを示す (06 行目)。ここでは、胡は“是吗”を用いて、少し意外で驚いたという気持ちを込めて、王の発話を受け取る (07 行目)。図3 は05 行目の“是吗”のピッチ曲線であるが、認識変化詞の“是吗”が下降のイントネーションで発話されていることがわかる。この“是吗”はターン冒頭に位置し、話し手が06 行目の回答そのものを問題視するのではなく、その回答によって自身の認識状態が更新されたことを示すために使用されている。

例 (4) [MCO#015 無料PCR 検査]

- 01 胡: 现在那个大街上都有很多那个免费的那个- 那个- 那个 PCR 的那个检测.
(今は道を歩くと無料PCR 検査のところをたくさん見かけますね.)
- 02 (0.4)
- 03 王: [哦::].
(お::)

- 04 胡：「我不知道」你们那边有没有。
(そちらにもあるかどうか分からないですけど。)
- 05 (0.5)
- 06 王：嗯，完全没有(h)见(h)过(h)。(=
(ええと，一度も見たことないです。)
- 07→ 胡：=哦是吗 (0.2) 东- 东京这边就好像大街上
(おっそうですか，東京では街には)
- 08 (0.8) 就还能看见很多。
(結構多いようですけど。)

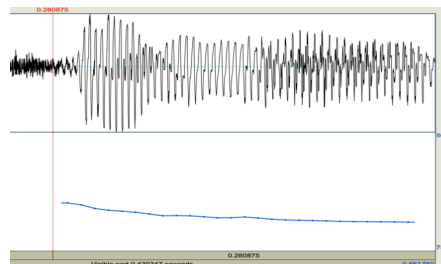


図3 例 (4) 07 行目 “是吗” のピッチ曲線

4. おわりに

これまでの認識変化詞に関する先行研究では感動詞の研究が多く見られたが，句の形式をとるものについての研究はまだ少ない状況にある。そこで，本研究では日中両言語における疑問標識に由来する認識変化詞を取り上げ，より詳細な分析を試みた。その結果，「そうか」および“真的吗/是吗”のような疑問句の形式を持つ認識変化詞は，自身と対話するような意識を表す場合もあれば，相互行為の相手に向けた反応として用いられる場合もあり，認識変化の帰属先や対応する状況が多様であることを明らかにした。

日本語の認識変化詞「そうか」は，未知の情報の受容を通じて話し手の認識状態が受動的に更新されたことを表明する際に用いられるほか，話し手が自発的に自身の認識を更新したことを示す場合にも使用される。「そうか」は，陳述と繋がりを持つ意味を表現する疑問標識に由来し，図1が示すように基本的に下降調をとることが特徴的であり，2回以上繰り返して使用されることも多い。一方，中国語の認識変化詞“真的吗/是吗”は，図2・3で示されているように，受動的な認識状態の更新を表明する際に下降調を取り，情報の受け取りという行為を遂行する相互行為的機能を果たす。

「そうか」と“真的吗/是吗”は共に疑問終助詞である「か」と“吗”に由来し，「X+疑問終助詞」の形で認識変化詞としての談話標識を形成する点で類似している。ただし，日本語の「か」は陳述とのつながりが強いとされる一方，中国語の“吗”は情報を受け入れる表現として用いられるものの，相手の反応を引き出す機能が依然として強く働いているようである。「そうか」の使用を通じて，自身が「思い出した」という態度を示し，独り言的な意味に焦点を当てる傾向が見られる。一方，“真的吗/是吗”にはそのような側面は見られず，むしろ疑問そのものを前景化し，相手との相互行為に焦点を当てる形で，未知の情報を受け取った際に起きた自身の認識状態の変化に関する態度を外向的に示す傾向がある。

日本語と中国語で表面上は類似した形式であり，ともに認識変化詞として機能していても，詳細に観察すると違いがある。このような差異は，認識変化詞が現れる状況の多様性に関する新たな視点を提供し，疑問句の形式と認識変化詞の機能との関係性に対する理解をさらに深めるものである。

謝辞 本研究が使用したデータは2022年度～2024年度日本学術振興会科学研究費補助金「COVID-19とデジタルネイティブ世代一多言語による語りの収集と分析」(課題番号 JP22H00660, 研究代表者 村田和代), Academic Senate, UCLA and Terasaki Center for Japanese Studies, ULCAの助成を受けて整備されたものである。

参考文献

- Endo, T. (2018). The Japanese change-of-state tokens *a* and *aa* in responsive units. *Journal of Pragmatics*, 123, 151-166.
- Heritage, J. (1984). A Change-of-State Token and Aspects of its Sequential Placement. In Atkinson, J. M. and Heritage, J. (Eds.) *Structures of social action* (pp. 299-345). Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上優(2016)。「話し手情報・聞き手情報」と文末形式—日本語と中国語の場合— 日本語/日本語教育研究, 7, ココ出版
- 井上優(2022). 日本語と中国語の情報受容の表現 感動詞研究の展開 ひつじ書房, 219-237.
- 加藤真(2010)。「発話場面」における終助詞「か」の意味機能 名古屋大学人文科学研究, 39, 27-40.
- 木村英樹・森山卓郎(1992). 聞き手情報配慮と文末形式—日中両語を対照して— 大河内康憲 (編) 日本語と中国語の対照研究論文集, くろしお出版, 235-275.
- 丹羽一彌(2003). 日本語「終助詞」の分類 人文科学論集, 37, 27-44.
- 鈴木英夫(1976). 現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について 国語と国文学, 53(11), 58-70.
- 鈴木英夫(1988). 終助詞についての構文論的研究—問いかけと省略を中心にして 国語と国文学, 65(3), 1-16.
- Zhang, W. (2019). 汉语自然口语会话中的信息回应标记“真的(吗/啊)” *Chinese Language and Discourse*, 10(1), 17-35.
- 邹海清・周孟菲(2018). “是吗”的话语功能及虚化 海外华文教育, 5, 23-30.